

花の命はなが〜くて

牡丹は、エルミタージュに運んできたときは、一見、再生は無理かもしれないという状態でした。長年、夫の魚の「餌やり」に関心のなかった私は、草花への「肥料やり」も積極的ではなかったのです。春に貧弱な花をつけた時、気づくべきでしたのに。

さらに、夏の暑さと、夫の闘病生活を支えるために無我夢中(?)で水やりを忘れられてしまった牡丹だったのです。瀕死状態の哀れな茎のみ残る姿でした。

いつものように「時の運」にかけようと願って、鉢の中に広がっていた根を短く切り、茎も切り詰め、小さな鉢に植え替えました。今、桜の花吹雪を背景に、牡丹は美しい花を3つつけて、よみがえりをはたしてくれました。



この牡丹は夫の母が80歳になり、呼び寄せ老親となって私たちのもとに来たとき、郷里の庭で40年ほど大切に育ててきたものなので、処分するには忍びなく、持ってきたものでした。1メートルを超える背の高さがありました。それから、私たちのベランダの大きな鉢で20年以上、毎年花を咲かせてきてくれたのです。花が大好きだった母のまなざしを、また、お手入れの優しさを受けてきた牡丹です。丈が短くなってしまいましたが、60歳以上のその姿は、「立てば芍薬、坐れば牡丹、歩く姿は百合の花」と、美しさをたとえる言葉通りに優しく、華やかに今日、私たちを慰めてくれています。

私たちも息子家族のそばのエルミタージュの呼び寄せ老親となりました。この牡丹と一緒に、母の思い出とともに、暮らせる春を喜んでいます。(2014.4.11)